

# Boomwhackers による音遊びに見られる子どもの 系統性に関する研究

——幼小接続期の子どもに着目して——

長 澤 希\*

A Study of the Systematicity of Children in Sound Play by Boomwhackers: Focusing on the Children in Connection Period between Kindergarten and Elementary School

Nozomi NAGASAWA\*

## I. 研究の背景と目的

本研究の目的は、幼稚園及び小学校でのブームワッカーによる音遊びの中で見られる子どもの姿を、音楽的発達の視点から整理することを通して、各学年の特徴と系統性を明らかにすることである。

平成29年3月、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が同時改訂された。今回の改訂の大きなポイントの1つが、幼児教育と小学校以上の教育を貫く柱を明確にすることである。その成長の基底にあり、乳児から18歳までさらにその先へと成長していく「力」の柱部分を「資質・能力」と呼び、その資質・能力によって幼児教育と小学校以上の学校教育で育成される子どもの力を共通に表した（無藤、2018）。つまり、各教科等によって教える内容や方法は異なりながらも、共通の力の育成に携わるのだということが明確になった。この共通の力である3つの柱が「知識・技能」（何を理解しているか・何ができるか）、「思考力・判断力・表現力」（理解している

こと・できることをどう使うか）、「学びに向かう人間性等」（どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか）である。

このことを踏まえて、小学校音楽科において育成をめざす資質・能力を見てみよう。平成29年改訂小学校学習指導要領には、次のように示されている。

表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解するとともに、表したい音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。

(2) 音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聴くことができるようにする。

(3) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培う。

\* 本学講師

(1)～(3)は3つの柱である資質・能力のそれ

ぞれに関する目標を示している。さらに、資質・能力を育成するためには、音楽的な見方・考え方を働かせることが必要であることが示されている。

この音楽的な見方・考え方とは、音楽科の特質に応じた、物事を捉える視点や考え方であり、音楽科を学ぶ本質的な意義の中核をなすものである（文部科学省、p10）。つまり、音楽的な見方・考え方である、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けること」を実現している子どもの姿を捉えることは、音楽科を学ぶ本質的な意義を捉えることでもあるといえよう。

本稿では、ブームワッカーによる音遊びを取り上げる。こうした楽器（いわゆるモノ）を探求することは、モノと関わる多様な方法を自ら見いだしたり、モノから生じる様々な事象の変化に気づいたりして、環境を知り、自己を知ることにつながる（藤井、2017）。音を介して環境と向き合い自己と向き合う子どもたちの感性の中に、音楽科で育成すべき資質・能力の源があると考えられる。

## Ⅱ. 先行研究の検討

幼稚園における音遊びで育まれる汎用的資質・能力に関して、既に三村、長澤、吉富（2017）が研究成果を発表している<sup>1)</sup>。三村らの研究は、年中児・年長児を対象としており、次のような成果があった。

○子どもたちは、予想以上にブームワッカーにのめり込んで遊んでいた。どうしたらもっと面白い音が出るのか、園内を動き回って探究していた。この姿は、【課題対応能力】<sup>2)</sup>の「粘り強く取り組む力」「工夫する力」

「様々な表現方法で表す力」に該当する。

○年中は個人活動が多かったが、同じ場所で他者と音を鳴らしているうちに、協働の活動が生じてくる場面があった。年長はほとんどが集団活動であり、協働で遊びを発展させることは、【課題対応能力】の「力を合わせて取り組む力」に該当する。また、他者の表現の面白さに気づき、自らもそれを取り入れてチャレンジするという姿が見られた。これは、【人間関係形成・社会形成能力】<sup>3)</sup>の「自分の思いを伝えたり、相手の思いに気づいたりする力」「状況を判断する力」「相手にわかるように表したり、相手の表現を受け入れたりする力」といえる。年長に比べて、年中はまだ他者と繋がる力が十分ではないことがわかった。しかし、音遊びの活動のなかで、言語によるコミュニケーションは十分にはとれていないが、音を合わせることや音で繋がる楽しさには気づいていた。つまり音楽によるコミュニケーションの芽が垣間見られたといえるだろう。

以上の先行研究では、資質・能力の系統表<sup>4)</sup>と子どもの具体的な姿を照合し、幼児期においてどのような資質・能力の芽が育まれているのかを明らかにしている。しかし、そのような資質・能力が小学校以降の子どもの姿とどのように関連しているのかは明らかにしていない。そこで、本研究では先行研究の幼稚園での取組と小学校での取組を関連付けながら、考察していくこととする。

## Ⅲ. 研究の方法

幼稚園及び小学校1年生、2年生において、ブームワッカーを使った音遊びを行う。幼稚園では自由遊びの時間、小学校では音楽科の時間

に活動を設定した。子どもたちへの説明や指示は一切行わず、子どもたちがどのようにブームワッカーへの興味を示し、遊びを展開していくのかを探った。撮影した映像から、子どもの姿と発言を抽出した。音遊びの活動は、子どもたちのもつ創造性によって展開されていく。そのような子どもたちの姿が、どのような系統性をもつのかを音楽的発達の螺旋状過程（図1）に基づき分類した。尚、幼稚園での取組は、先述した先行研究において筆者は三村らとともに既の実施しているため、本稿では小学校1年生及び2年生に特化して論じ、幼稚園での取組と関連させながら考察していく。

スワニックとティルマン（1986）は、膨大な数の子どもの作品を分析し、音楽的発達の系統性について8つの段階に分けて述べている。発達レベルごとに子どもたちの作品を判定し、数値化したことにより、音楽的発達を観察することが可能になった。さらに、音楽的発達はある

道筋に沿って生じるということが示された。本稿においては、この概念に依拠し、子どもの姿を観察する指標として活用する。音楽的発達の8つの段階とは、「感覚的な段階」、「操作的な段階」、「個人的表現性の段階」、「音楽の慣用的語法の段階」、「思索的な段階」、「音楽の慣用的語法の段階」、「象徴的な段階」、「体系的な段階」である。図1のように螺旋的である理由は、発達の過程が循環的であること、累積的であること、そして音楽的発達が個人的で特異な側面と社会的に刺激され反応する側面との間を振り子のように往来するからである（野波、1992）。体系化されたこの音楽的発達のモデルに子どもたちの具体的な姿を確認することにより、子どもたちの発達の筋道に対処することを意識的に試みることができるのではないかと考える。

また、音遊びの素材として使用したブームワッカーは、1990年代にアメリカで生まれたプラスチックの筒状の打楽器である。それぞれの筒には音階があり、筒を手に持ち、身体や床、机等を叩くだけで音を出すことができる。音階を演奏する際に複数で協力して音を出す必要があることから、教育効果があると考えられ、幼稚園や小学校等でも知育玩具として使われている。年齢を問わず誰でも気軽に使えることや個人の経験値や能力差を問わないこと、さらに他の楽器に比べて安価であること等から、教育現場で活用する教材として非常に有効であるという知見から本稿で扱うこととした。

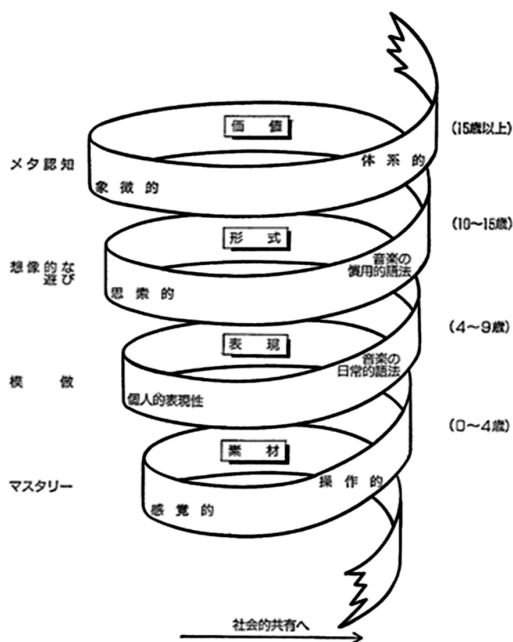


図1 音楽的発達の螺旋状過程  
（スワニックとティルマン、1986）  
（野波、1992、p109）

#### IV. 音遊びの概要

##### (1) 小学校1年生

- ・実施時期：平成29年10月12日
- ・対象：32名
- ・活動時間：40分間

(2) 小学校2年生

- ・実施時期：平成29年10月11日
- ・対象：32名
- ・活動時間：40分間

(3) 使用したブームワッカー

- ・ダイアトニック 8音×2セット  
(C4、D4、E4、F4、G4、A4、B4、C5)
- ・クロマチック 5音×1セット  
(C4<sup>#</sup>、D4<sup>#</sup>、F4<sup>#</sup>、G4<sup>#</sup>、A4<sup>#</sup>)
- ・ベースダイアトニック 7音×1セット  
(C3、D3、E3、F3、G3、A3、B3)
- ・エクステンション 7音×1セット  
(C5<sup>#</sup>、D5、D5<sup>#</sup>、E5、F5、F5<sup>#</sup>、G5)

ブームワッカーは、最低でも1人1つ以上は自由に使うことができるよう、児童数以上の数を用意した。また、子どもの気づきが広がるような様々な音域のもの（音によって長さや色が異なる）を使用した。また、ブームワッカーの中央に標記してある「ド」等のカタカナで書かれた音階は、子どもに見えないようにシールで隠し、子ども自身が耳で聴いて判断しながら音遊びが行えるよう、そのために必要でない情報は予め排除した。子どもたち自身が好きな音を選んだり友だちと交換したりして自由に遊ぶことをねらいとしているため、用意したブームワッカーはばらばらに混在した状態で音楽室に置き、活動を始めた。

V. 音遊びの実際

小学校1年生の実践では、40分の音遊びの中で18通りの子どもの姿が抽出できた。それらは、感覚的な段階、操作的な段階、音楽の日常的語法の段階の3段階に分類できた。

①感覚的な段階

筒を落として鳴らす

何度も繰り返しブームワッカーを落とし、音の探求を繰り返している。片手で落としたり、両手で落としたり、あるいは持つ手の位置を変えたりしながら楽しむ様子がある。

揺れるものを叩く

ゴミ箱の揺れる蓋を見つけて叩き始める。音そのものを探求しているというよりも、叩くと揺れるゴミ箱の蓋がひっくり返る様子を楽しんでいる印象である。

筒に耳をすまして聴く

ブームワッカー自体を耳にあて、「海の音がする。」と呟く。すると、周囲にいた子どもも次々と自分の持っていたブームワッカーを耳にあて、「本当だ。」「ザーって音がするね。」と共感している。

壁の叩く場所を変える

壁の様々な場所を叩き、「なんか音がちがう。」と発言した。ブームワッカーは固定の音高をもっているため、この男児は叩いた対象となる壁の音に耳をすませ、その違いに興味をもったことが推測できる。

②操作的な段階

筒を滑らせる

重ねてあった椅子の側面にブームワッカーをあて、滑らせることで音が「ガタガタ」と鳴ることを見つける。最初は一番上の椅子を叩くだけであったが、次第に側面を滑らせることで面白い音が鳴ることに気づく。

一人が筒をもちもう一人が叩く

「あ！わかった！」と言った子どもの真意は不明だが、持つ人、叩く人、と役割を交互に変えながら音の出し方を工夫してる。

表1 小学校1年生の分類

		子どもの姿・発言					
個人的表現性の段階	感覚的な段階	 筒を落として鳴らす	 揺れるものを叩く	 筒に耳をすませて聴く	 縦の叩く場所を変える	「海の音がする。」	「なんか音がちがう。」
	操作的な段階	 筒を滑らせる	 一人が筒をもちもう一人が叩く	 筒を隠して叩く	 動きながら叩く・友だちの音を聴く	「ガタガタいう。」	「あ！わかった！」
	音楽の日常的語法の段階	 4人同時に筒を重ね鳴らす	 叩く筒を変化させる	 縦にぶら下げた筒を叩く	 2人同時に床を叩く	「そっちら順番に叩いて。」	ドミファソ、ドミファソ
		 簡単なフレーズを創る	 叩くタイミングを指示する	 繰り返しのメロディをつくる	 壁を交互に叩く	「おもしろい音だね。」	「3回ずつ叩くよ。」

※ 表中の「筒」＝ブームワッカーのことを指す。

筒を隠して叩く

4人でブームワッカーを囲み、他者から見えなように音を鳴らすことにこだわっている。彼女たちの周囲にその様子を見ている児童がおり、その児童たちに見つからないように音を鳴らすことを楽しんでいる。

動きながら叩く・友だちの音を聴く

ブームワッカーをTの字に置き、両側の2人がその先端に耳をあてる。他の2人が手にもったブームワッカーをTの字のブームワッカーにリズムカルに打ちながら動く。その音を両側の2人が聴いている。

4人同時に筒を重ね鳴らす

4人が円になり、個々が持つブームワッカーを振り、重なって偶然的に出た音を楽しむ。

叩く筒を変化させる

このチームでは、ブームワッカーを持つ人、叩く人、の役割は変わっていない。ただし、異なる音の組み合わせを探している。よりよい響きになる2音の組み合わせを探求している。

縦にぶら下げた筒を叩く

3人組の1人がブームワッカーを縦に持ち、他の2人がそれを叩く。ぶら下げたブーム

ワッカーは不安定でゆらゆら揺れている。揺れる様子を楽しみながら、叩く2人は相談をした様子もなく、交互に鳴らし始める。

2人同時に床を叩く

「セーのっ。」と一人が声をかけ、同時に床を叩いている。

③音楽の日常的語法の段階

簡単なフレーズを創る

3人組で簡単なフレーズを創っている。4分の4拍子の音楽が出来上がる。

「G4・A4<sup>#</sup>・A4<sup>#</sup>・(うん)・G4・A4<sup>#</sup>・A4<sup>#</sup>・(うん) G4・A4<sup>#</sup>・A4<sup>#</sup>・(うん) G4・A4<sup>#</sup>・A4<sup>#</sup>・(うん) (うん)・(うん)・(うん) C5」

叩くタイミングを指示する

3人中2人がブームワッカーの両端を持ち、もう1人が両手にブームワッカーを持っている。「そっち(左手)から順番に叩いて。」と1人の男児が指示をする。指示を出された女児は左手、右手と交互に動かして叩いている。

繰り返しのメロディをつくる

音高を聴き分け、音の低い順に並び変えている。「C4、E4、F4、G4」の順に並び、延々とその音の並びで演奏を繰り返す。誰からともなく、次第に速度を速めていく。

壁を交互に叩く

壁の叩く場所を変えながら、2人で交互に叩く。音で会話をしているような様子が伺える。

ホワイトボードを交互に叩く

2人でホワイトボードと黒板の間を叩き合いながら、「おもしろい音だね。」と呟く。3拍子の一定のリズムのパターンで叩き合っている。

上下左右から叩く

3人組の1人が、ブームワッカーを縦に持

つ。もう1人が「3回ずつ叩くよ。」と話し、4拍子の一定のリズムで上下左右を3回ずつ叩いている。その様子を1人が見て、その後叩き方を真似して叩いている。

小学校2年生の実践では、40分の音遊びの中で8通りの子どもの姿が抽出できた。それらは、操作的な段階、音楽の日常的語法の段階の2段階に分類できた。

①操作的な段階

声で鳴らす

「あー！」と大きな声で叫んだり、小さな声で囁いたりする。

声を集める

歌声を真ん中に集めようとしている。集まった数人で、ブームワッカーを口に当てたまま既習曲を歌っている。

筒を滑らせる

並んだ譜面台の足の部分にブームワッカーをすべらせ、カタカタとなる音を楽しんでいる。

②音楽の日常的語法の段階

円になって順番に鳴らす

8人組で円になる。音の並びにこだわりはないようだが、並んだ順番に音を鳴らすことを試している。1巡目で終わることはなく、2巡目、3巡目と繰り返している。

教科書から譜面を探す

5人組になると、1人の女児が棚から教科書を取ってくる。「このやってみよ。」と提案するが、別の女児は違う曲を弾きたい様子である。既習曲の中から、5曲取り上げ、多数決が始まった。多数決で「小犬のビンゴ」に決まると、全員で歌いながらブームワッカー

表2 小学校2年生の分類

		子どもの姿・発言		
個人的表現性の段階	操作的な段階	 声で鳴らす	 声を集める	 筒を滑らせる
	音楽の日常的語法の段階	 円になって順番に鳴らす	 教科書から譜面を探す	 リズムカルに連打する
		 向かい合って真似をする	「この曲やってみよ。」	「あと“ミ”がいるよ。」

を鳴らし始めた。旋律を演奏するのではなく、伴奏をするかのようにリズムを刻んでいる。

リズムカルに連打する

始めは1つのブームワッカーを床に置き、両側からそれを叩いていたが、叩くうちに床に置いていたブームワッカーが弾みで浮かび始めたことに関心を抱き、次第に叩く速度を上げていく。単に乱暴に叩くのではなく、リズムカルに叩く様子が伺える。

特定の音を探す

「一緒にやろう。」と近くにいた7人が集まる。個々に持っていたブームワッカーを並べて長さを比べている。さらに、1つずつ鳴らし、音高を全員で確かめている。「あと、「ミ」がいるよ。」と1人の男児が呟くと、ミの音をもっている児童を探し始める。

向かい合って真似をする

2人組の男児と女児が、互いの表現を真似して叩いている。リズムが次第に変化する。様々なリズムの模倣が終わると、次は同時に

演奏を始める。どちらかの間合いを感じとりながら、互いに合わせて演奏しようとすることを楽しんでいる。

2年生の実践では、1年生に見られた感覚的な段階の姿が現れなかった。また、個々に音遊びに没頭している子どもは1名のみであり、その他の児童は4名以上の集団を形成し、音遊びを行っていた。さらに、音楽の日常的語法の段階の姿では、1年生に見られたような反復や強弱等の音楽の要素を楽しむ姿ではなく、譜面から既成の音楽を演奏しようしたり、旋律を演奏するために必要な音を探したりする姿が現れていた。このことから、偶然的に生まれた音や音楽を楽しむというよりも、自分たちの表現したい音楽のイメージがある程度形成されており、それに向かって工夫しようとしていたと考えられる。

一方で、2年生に比べて1年生の方が、子どもの姿のバリエーションは多様であった。2年生には見られなかった感覚的な段階の姿

表3 各学年の子どもの姿の特徴

	音楽的な見方・考え方を働かせることに繋がる子どもの言動	音楽的発達段階
年 長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・共有する（一緒に鳴らすことが楽しい）</li> <li>・<u>身体を動かす</u>（感じたことを身体で表現する）</li> <li>・試行する（表現方法を試す）</li> </ul>	感覚的な探求と操作的な興味が見られる
1 年生	<ul style="list-style-type: none"> <li>・共有する（一緒に鳴らすことが楽しい）</li> <li>・共感する（「海みたいな音だね。」「そうだね。」）</li> <li>・試行する（表現方法を試す）</li> <li>・比較する（音の順番を変える等）</li> <li>・<u>伝え合う</u>（どのように叩くのか指示をする）</li> </ul>	個人的で特異な側面と社会的に刺激され反応する側面とを行き来する
2 年生	<ul style="list-style-type: none"> <li>・共有する（一緒に鳴らすことが楽しい）</li> <li>・共感する（「それいいね。」「やってみよう。」）</li> <li>・試行する（表現方法を試す）</li> <li>・比較する（筒の長さを比べる）</li> <li>・伝え合う（「この曲やってみよう。」）</li> <li>・課題意識をもつ（「ミ」があればこの曲が演奏できる）</li> <li>・<u>関連付ける</u>（既習事項を想起する）</li> </ul>	操作的な段階は社会的共有によって促進される 音楽の表現性を他者と共有せざるを得ない

は、主体的に音と関わっていくための源となる好奇心や探究心の現れであると考えている。

両学年とも、音楽的発達の5段階目である思索的な段階以上の姿は現れなかった。

## VI. 幼児期の姿と比較する

では、ここからは幼稚園での実践も踏まえて改めて音遊びの様子を整理していく。年中では個人活動が多く見られたが、年長ではほとんどが集団活動であり、協働で遊びを発展させていた（三村、2017）。その点は小学生ではさらに顕著であった。1年生・2年生ともに、活動が始まってすぐに協働の遊びをし始めていた。しかし、同じ協働でも、音楽的な視点で捉えた際に、各学年によって質の異なる協働を行っていたことがわかる。この点について、どのような協働が見られていたのかを整理し、表3に示した。

年長から1年生にかけて、「共感する」「比較する」「伝え合う」姿が加わり、さらに1年生から2年生にかけて、「課題意識をもつ」「関連付ける」姿が加わった。

共感したり関連付けたりすることは、音楽的な見方・考え方を働かせるために必要な手立て

であり、このような姿が既に音遊びの中に存在していたということは、子どもたちが既に資質・能力を育むために必要な学びの芽を持ち合わせていたと考えることができよう。また、学年が上がるにつれて手立てとなる姿は複数になっており、「共有する」「試行する」の2つにおいては、どの学年にも現れていた。

その他、幼稚園の年長で多く見られた子どもの姿として、ブームワッカーで「棒立て競争」をしたり、鼓笛隊のようにブームワッカーを抱えて「音楽隊」の行進を真似したりするなど、楽器を演奏の手段ではないモノとして捉え楽しんでいる姿もあった。このような姿は、小学生には見られなかった姿である。また、滑り台にブームワッカーを転がしたり、雲梯や木を鳴らしたりする等、園庭の遊具とブームワッカーを関わらせて遊ぶ様子も多々見られていた。

## VII. 総括

本稿の目的は、幼稚園及び小学校でのブームワッカーによる音遊びの中で見られる子どもの姿を、音楽的発達の視点から整理することを通して、各学年の特徴と系統性を明らかにするこ



とであった。ブームワッカーによる音遊びでは、どの子どもも一生懸命に、自ら楽器に働きかけ、様々なことを試しながら、自分たちの世界を広げていた。特筆すべきは、どのような資質・能力を育成するのかというねらいや教師の働きかけを取って意図しなかった遊びの中にも、子ども自身がモノに対するあらゆる働きかけをし、音楽的な見方・考え方を働かせるために必要な手立てが姿として現れていたことである。年長に見られるような感覚的な段階の音遊びから、2年生に見られるような社会的共有によって促進される操作的な段階の音遊びまで、あらゆる場面において子どもの創造的な力が発揮されていた。このような姿の表出が、仮に音や音楽を探求する音遊びだからこそ見られたものであるとするならば、音や音楽を介して人を育てる教科である音楽科が通教科的能力を育成していくべきこれからの学校教育において必要不可欠なものであると言えるのではないだろうか。

今後は、このような子どもの姿をカリキュラムの編成に役立てていく方法を考えていくとともに、3年生以上の学年にも焦点をあて、子どもの姿から捉えることを通してこれからの音楽科教育への示唆を得たいと考えている。

## 註

- 1) 三村真弓、長澤 希、吉富功修 (2017) 「幼稚園における音遊びで育まれる汎用的資質・能力に関する研究—広島大学附属三原学校園の取組に着目して—」、平成29年10月22日に日本音楽教育学会第48回全国大会 (愛知教育大学) に於いて発表。
- 2) 課題対応能力とは、広島大学附属三原学校園で通教科的能力として位置づけている3つの資質・能力のうちの1つの柱である。仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力として捉えている。
- 3) 人間関係形成・社会形成能力とは (同上)、他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力として捉えている。

- 4) 資質・能力の系統表とは、広島大学附属三原学校園が独自に開発したものである。本学校園は、平成24年度から平成26年度までの3年間、さらに平成27年度から平成29年度までの3年間、文部科学省から延長指定を受け、計6年間の研究開発を行ってきた。筆者は、平成29年度まで本学校園で勤務し、研究開発にも携わってきた。幼児期5領域に根ざした資質・能力系統表 (資料1)、音楽科の本質に根ざした資質・能力系統表 (資料2) がその一例である。

## 引用参考文献

- 安彦忠彦 (2012) 『子どもの発達と脳科学』勁草書房  
 広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校 (2018) 『文部科学省研究開発学校指定校 研究開発実施報告書 平成29年度【第6年次 (延長3年次)】』広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校  
 広島大学附属三原学校園 (2018) 『幼小中一貫教育で育む資質・能力 自ら伸びる子どもを育てる』株式会社ぎょうせい  
 今川恭子 (2017) 『音楽を学ぶということ これからの音楽を教える・学ぶ人のために』教育芸術社  
 岩手県総合教育センター教育研究 (2000) 『幼稚園と小学校低学年における音楽の発達を促す指導・援助の在り方に関する研究』国立教育研究政策所  
 キース・スワニック著、塩原麻里・高須 一訳 (2004) 『音楽の教え方：音楽的な音楽教育のために』、音楽之友社  
 キース・スワンウィック著、野波健彦・石井信生・吉富功修・竹井成美・長島真人訳 (1992) 『音楽と心と教育 新しい音楽教育の理論的指標』音楽之友社  
 厚生労働省 (2017) 『保育所保育指針』  
 厚生労働省 (2017) 『保育所保育指針解説書』  
 小島律子 (2013) 『楽器づくりによる想像力の教育—理論と実践—』黎明書房  
 三村真弓 (2018) 「音楽科の「見方・考え方」に必要な要件とは何か—岐阜県古川小学校の音楽科授業実践から—」『学校教育』広島大学附属小学校学校教育研究会、pp. 14-21  
 無藤 隆 (2018) 『10の姿プラス5・実践解説書』ひかりのくに  
 文部科学省 (2017) 「新しい学習指導要領の考え方—中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ—」文部科学省  
 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領』  
 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領解説』  
 文部科学省 (2017) 『幼稚園教育要領』  
 文部科学省 (2017) 『幼稚園教育要領解説』  
 文部科学省中央教育審議会 (2015) 「資質・能力等関

係資料」教育課程部会幼児教育部会資料4  
 西沢久実 (2018) 「『音楽的な見方・考え方』を働かせて、資質・能力の育成を目指す音楽科の授業プラン」『学校教育』広島大学附属小学校学校教育研究会、pp. 6-13  
 太田友子 (2018) 「幼児期における「振り返り」活動—幼小接続期におけるメタ認知に関する一考察」『大阪総合保育大学紀要』第12号 pp. 179-196  
 佐藤洋一、左近妙子 (2018) 「資質・能力を育てる多様なテキスト形式、「考えの形成と深化」—「空を見上げて」(中学1年)の「精査・解釈」・汎用性(レジリエンス)—」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』第3巻 pp. 45-52  
 島崎智恵 (2017) 「幼児の遊びや生活における表現の活動を豊かにする指導の工夫—幼稚園と小学校音楽科の接続を踏まえて—」国立教育研究政策所  
 高橋雅子、沖林洋平、友清祐子、白岩 洵、川原真矢、門田集二、品川美佐枝、金光修一 (2018) 「音楽科教育における「主体的・対話的で深い学び」に関

する研究—音楽科における「深い学び」の尺度開発」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第46号 pp. 1-10  
 高木正之 (2018) 「資質・能力を育てる新しい教科教育実践—理科の視点・立場から—」『日本教科教育学会誌』第40巻第4号、pp. 85-91  
 田中宏幸 (2018) 「資質・能力を育てる新しい教科教育実践—国語科の視点から—」『日本教科教育学会誌』第40巻第4号、pp. 79-84  
 田中浩司 (2014) 『集団遊びの発達心理学』北大路書房  
 東京都教育委員会 (2016) 「音楽的な見方・考え方を働かせて、音楽と主体的に関わることができる児童の育成」『平成28年度教育研究報告書音楽』東京都教育庁指導部指導企画課 pp. 1-24  
 山田秀和 (2018) 「社会科におけるリテラシー教育の統合方法—アメリカに見られるアプローチを類型化して—」『日本教科教育学会誌』第41巻第3号 pp. 29-41

資料1 幼児期5領域に根ざした資質・能力系統表

通教科的能力		人間関係形成・社会形成能力		キャリアプランニング能力		課題対応能力					
5つの領域		領域「人間関係」		領域「健康」		領域「人間関係」		領域「健康」		領域「言葉」	
資質・能力区分・学年	自分の思いを伝えたり、相手の思いに気づいたりする力	状況を判断する力	相手にわかるように表したり、相手の表現を受け入れたりする力	自分たちで生活を整える力	身近な女だちのために行動する力	粘り強く取り組む力	工夫する力	力を合わせて取り組む力	様々な表現方法で表す力		
入門期	年少	表情や身振り、言葉などで自分の思いを出すことができる。	相手の様子に気づくことができる。	自分が感じたことや考えたことを様々な表現方法(声・音・動き・かく・つくる・言葉等)で相手に表す楽しさを感じることができる。	自分に必要な生活の仕方を知り、自分で行うことができる。また、自分でできないことは教師の助けを借りて、自分で行うことができる。	身近な女だちのために興味をもった運動遊びを友だちや教師と一緒にやってみることができる。	身近なものや自然に興味をもつことができる。	友だちや教師の影響を受けながら、やりたいと思ったことをやってみることができる。	感じたことを様々な表現方法(声・音・動き・かく・つくる・言葉等)でそのまま表すことができる。		
	年中	自分の思ったことを相手に伝えようとしたり、相手の思っていることに気づいたりすることができる。	相手の様子を見て、自分がよいと思ったことを行動することができる。	自分が感じたことや考えたことを様々な表現方法(言葉・音・動き・かく・つくる等)で相手に表したり、相手の表現の面白さに気づいたりすることができる。	みんなが一緒に過ごすために必要な生活の仕方を知り、自分で行うことができる。	身近な女だちのために興味をもつことができる。周りに認められることに喜びを感じる。	興味をもった運動遊びに挑戦したり、繰り返し取り組んだりすることができる。	身近なものや自然に興味をもつことができる。	やりたいと思ったことを友だちと一緒に考えたり、試したりすることができる。	イメージを膨らませながら様々な表現方法(言葉・音・動き・かく・つくる等)で思いのままに表すことができる。	
幼小接続期	年少	自分の思ったことを相手に伝えたり、相手の思っていることに気づき、受け入れたりすることができる。	相手の様子を見ながら、相手のことを考えて行動することができる。	自分が感じたことや考えたことを相手にわかるように表したり、相手の様々な表現に親しみをもって受け入れたりすることができる。	幼稚園のみんなが一緒に過ごすために必要な生活の仕方を知り、自分たちで整えることができる。	身近な女だちのために興味をもつことができる。自分(たち)で進んで行動することができる。	運動遊びに積極的に挑戦し、思いの現実に向け粘り強く取り組むことができる。	身近なものや自然に興味をもつことができる。	共通の目的に向かって、友だちと協力しながら考えたり試したりしながら工夫して遊ぶことができる。	イメージしたものになるように様々な表現方法(言葉・音・動き・かく・つくる等)で工夫しながら表すことができる。	

資料2 音楽科の本質に根ざした資質・能力系統表

通教科的能力	人間関係形成・社会形成能力 (関係を構築する力)	キャリアプランニング能力 (なりたい自分になる力)	課題対応能力 (達成へ向かう力)
教科の本質に根ざした 資質・能力	音や音楽に対する気づきや感じたことを交流したり、仲間とともに音楽を創り上げたりする中で、多様な価値を認める素敵な発想をもち、共感したり一体感を味わったりすることができる。 (共有)	音楽に対する感性を働かせ、他者と協同しながら音楽表現を生み出す中で、音楽による自己表現をしたり音や音楽に対して自分なりの価値を考えたりすることができる。 (自己表現、価値の創造)	音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉えて考え、感性と知性を働かせながら、豊かな表現を追求することができる。(追求)
幼小接続期 年長 1年 2年	仲間とともに音で遊んだり表現を真似したり音楽を創ったりする中で、共感したり一体感を味わったりする。	聴こえてきた音の拍にのったり、音や音楽に対して自分の中で共感する何かを見つけたりするなどの音楽的感覚を身につける。	いろいろな音素材や音の組み合わせを見つけたり、協同して演奏したり創ったりすることが楽しいという感覚を味わう。